

第3回 幼保小合同研修会

日時 令和6年7月17日（水）午後3時～午後4時40分

場所 郡山市役所 特別会議室（対面研修）

教育講演

「特別支援教育について」

～個に応じた支援を図るための幼保小連携～

郡山女子大学 家政学部 生活科学科

教授 小林 徹 氏



小林先生は、今年度より「【郡山市版】幼保小の架け橋プログラム」の委員として、ご指導をいただきます。

講師の小林先生は東京都の中学校教員として、特別支援学級を25年間担当されました。2022年より郡山女子大学家政学部生活科学科教授として特別支援教育の障がい児保育について講義をされています。また、郡山市教育支援委員会の委員として郡山市の子どもたちの就学について貴重な意見をいただいております。今回は、特別支援教育について、適切な支援を図るためにはどのように幼保と小が連携を図れば良いのかを、先生の豊富な経験をお聞きしながらご指導いただき実践のヒントを学びました。幼保小合同研修会では、5年ぶりの対面研修で、多くの方が参加されました。

※参加者→幼稚園・保育所（園）・認定こども園・小学校関係者等 100名

【講演の主な内容】

- 郡山市の幼保小連携
- ライフステージを見通す
- 特別な教育的ニーズ
- 支援の難しさ
- 大好きなものの力を借りて
- 個と集団を考える
- 生涯発達について



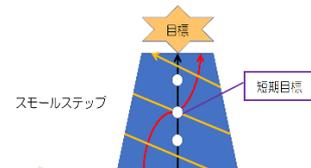
望ましい連携の姿とは

連携する者どうしが、よく知り合う。（同じところ・違うところ）お互いの違いを尊重しながら、一緒に取り組める部分を考え、具体的に実践する。連携が取れていると安易に満足しない。自治体における連携においては、連携が維持・継続できるように行政が積極的にバックアップする。

特別支援教育の充実を図るための取組の方向性

幼稚園等においては、日々の園での活動や生活の中で考えられる困難さに対する指導や支援の工夫の意図、手立ての例を具体的に示すことが必要である。

短期目標と手立て



スモールステップは「小さな階段」いきなり目標に到達するわけではないので、ニーズに合った手立てを考えよう。

【アンケートから～参加者の声～】

- 障がい名ではなく、その子にどんな困難さがあるのかという視点から見つめ直していきたいと感じました。様々な豊富な事例から子どもたちの姿、そしてそのとらえ方を学ぶことができました。（小学校 教諭）
- 困った行動の裏側には、様々な意味がある。その意味を探るために、保育の現場ではよく観察すること、情報、記録が大切という言葉に、改めて自分の保育を見直していきたいと思った。“人間は一生成長する”ということを忘れず、大切に保育にあたっていきたい。（保育所 保育士）